

みなさん、こんにちは。ただいまは、作品朗読、どうもありがとうございました。こうやって聞いていると、なんか、自分で書いたものとは思えませんね。

この絵本は1995年、ちょうど戦後50年の時に出した絵本なので、来年でもう30年になるんですね。残念ながら、絵を描いていただいた永島慎二さんは亡くなられましたけれど、30年も経った絵本の作者に、こういう機会をいただいたことを、本当に嬉しく、ありがたく思っています。

僕は武蔵野市に呼んでいただいておりますのは、今回は2回目になります。前の時は2014年ですから、ちょうど10年前になりますけれども、その時は、11月24日の、「その日」にお話をさせていただきました。この中にはその時にいらした方もいらっしゃるかもしれませんが、どうしてもその時の話と重なると思うんですけれども、その点はお許しいただければと思います。

僕は、今ご紹介いただきましたように、生まれたのは1950年、昭和で言えば25年の3月ですから、いわゆる団塊の世代の最後のほうになります。出身地は秋田で、秋田県仙北郡長野町という所なんですけど、新幹線で行きますと、盛岡で東北新幹線と秋田新幹線が分かれます。そして、秋田県に入って、最初に田沢湖って駅があって、その次に、小さな城下町で桜の名所としても知られている角館という駅があって、それから花火で有名な大曲の駅があって、それから終点の秋田市なんですけど、僕の生まれた長野っていうところは、角館と大曲に挟まれた、いかにも純農村地帯という感じの田舎町で、そこで生まれ育ちました。

僕も一応戦後の生まれですから、もちろん戦争体験はないわけです。そして、この武蔵野市とも特に縁のない人間なわけで、そういう僕が、なぜこの題材に出会って、この絵本を書こうと思ったのか、それが今日のお話になるかと思っています。

その前提で、ちょっと自己紹介みたいになりますけれども、僕は6人兄弟の末っ子で、父は明治の終わり頃の生まれです。明治生まれの父を持つ最後の世代になるかなと思います。それで、母は大正2年生まれ、6人兄弟のうち、上2人は兄たちなんですけど、昭和一桁生まれです。中の2人、3番目と4番目は姉たちなんですけど、昭和10年代の生まれ、そしてすぐ上の姉と僕が戦後、昭和20年代の生まれ、ということで、まるで「一家で近代史をやっている」、そういう家族なんです。ですから同じ家族でも、それぞれが背負っている時代が、全然違うわけですね。そんな中で僕は育ちました。

戦後と言っても、僕が生まれた頃は、今から思えば、まだまだ戦争の匂いが濃厚にあった時代でしたけれど、僕にとっての「戦争」っていうのは、ほぼそのまま父親のことになります。今申し上げたように、明治生まれの父親ですが、父は地主の家の次男坊に生まれ、まあ、中程度の地主だったんですけど、いわゆる大地主というわけではないので、お坊ちゃまという育ちではないんですね。

次男ですから、うちは継げない。そして、分家もだめですね。地主の家は、なにより田畑

が分散されることを嫌います。それで父親は、まあ成績も悪くなかったので、上の学校に行きたかったんだけど、許してもらえなかった。経済的に無理っていうなら父も諦めがついたんでしょうけど、上の学校に行くお金がないわけじゃない。いわゆる「百姓に学問はいらない」という感じで、行かせてもらえなかった。それがとても残念だったわけですね。さっきの笹塚耕一さん（『麦畑になれなかった屋根たち』の主人公）の境遇が、父の姿とちょっと被ってるんですけども。

それで小学校の高等科までは行けたわけですけど、その後は家に残って農作業を手伝われる。昔の地主の家というのは、小作の次男、三男たちが使用人として働いていたわけですが、その人たちに交じって働いていたわけです。ご存知のように、昔は徴兵制度で、20歳になると、軍隊生活を3年経験しなければいけない。そして、父の場合は、それが終われば、昔の旗本の次、三男ではありませんが、同程度かもうちょっと規模の小さい地主の家に、男の跡継ぎがいない家に婿に行かされるっていうコースがほぼ見えていた。実際、候補の家が決まっていたみたいですね。しかし、父は、そういう将来像に耐えられなかったんですね。19歳、つまり来年が徴兵検査だっていう時に、家の判子を持ち出して海軍に志願したんですね。言ってみれば家出みたいなものです。普通の家出なら、親は連れ戻せばいいわけでしょうけど、さすがに軍隊に志願されてしまうと、国家が奨励してることですからね、親も連れ戻すってわけにはいかないんで、まんまと海軍に入隊したわけです。

どうして陸軍ではなくて、海軍を志願したかということ、多分、海軍の方が航海に出るために、いろいろ技術的な教育を受けられる、そういう機会が多いのではないかと考えたようです。実際に父は、そうした教育を受けることができ、ある程度優秀な成績を収めると、もう一つ上の段階の学校に行けるわけで、そこをクリアするとまたもう一つ上の学校に行けるというふうに、成績優秀であればですね、軍隊の学校制度をクリアしていったら、最後は海軍兵学校、幹部養成の学校にですね、入ることができた。そして、そこを出れば士官になれる、そういう道が、とても狭い道なんだけど、開かれていたわけです。普通は海軍士官学校というのは中等学校、今の高校を出て、その優秀な人たちが行く、言わばエリートコースなんですけども、うちの父親はそうやって叩き上げで海軍兵学校に入って、だからその時はもう30歳ぐらいで、結婚して子どももいた、そういう状況だったんですね。ですから、田舎では、父はやや立志伝中の人物だったんですね。終戦時は海軍大尉で、兄たちが子どもの頃は、横須賀に住んでいました。

ところが、敗戦と共に全てを失って、秋田に戻ったものの、さっき申し上げたように、家は飛び出したような状況ですし、その地主の家も、農地解放で大変ですから、とても援助は期待できない。当時、職業軍人は公職追放ですから、ろくな仕事に就けない。ですから、僕が生まれた頃はまさにどん底で、さっき申し上げたように、農村地帯のちっちゃな町なのに、他所の家の2階の一室を借りて、一家8人が住んでいた。まあ、東京なら珍しくないかもしれませんが、そういう暮らしだったわけです。僕が物心ついた頃は、ようやく公職追放が解けて、父は町の役場に勤めていました。

ですから、僕にとっての戦争というのは父親がまるきり体現しているわけですが、その父親に対する感情というか、思いにはちょっと複雑なものがあって、というか、二つに分裂しているところがあって、一つは、自力でいわば運命を切り拓いて、海軍兵学校まで入った父親を誇りたいというか、尊敬する気持ちも、もちろんありました。なにせ父親は、僕に高校の数学を教えることができましたし。

一方で、僕は戦後の生まれで、戦後の民主教育を受けて、兄たちも組合活動なんかもしてた影響もあって、その少年からすると、父親がまちがった戦争を遂行した大日本帝国軍隊のプロの軍人だったということは、許せないというか、否定したい気持ちもあるわけです。そんな中で、中学生の頃ぐらいかな、なんとかその矛盾した気持ちに折り合いをつけようという風に考えたんですね。どう折り合いをつけたかっていうと、父親が自己実現を果たそうと思えば、さっき言ったような境遇ですから、軍隊に行くしかなかった。そのまま家にいれば、そういう道は開けなかったわけですから、父が悪いんじゃないくて、軍隊に行かなければ勉強できない、そうした国家のありようとか体制とか、そういうものが父をしてああいう道に引き寄せたのだ。だから、悪いのは父ではなくて、当時のそういう国のあり方、体制だったんだ、まあ、そんな風に考えることで、折り合いをつけたわけです。

その後、僕は大学に入って、児童文学に出会い、学生の頃から評論や創作を志すようになったんですけども、その日本の児童文学の中に、「戦争児童文学」と呼ばれる、戦争を題材にしたたくさんの作品があります。ポピュラーなところでは、『かわいいそうぞう』とか、『ガラスのうさぎ』とかいった絵本や作品、また教科書で言えば『一つの花』とか、有名な作品がありますけれども、そういう作品を、僕は大人になって、児童文学を志すようになってから読み始めたわけです。

しかし、どうもですね、そういう作品を読みながら、今ひとつ不満というか、腑に落ちないというか、そういう感じがあるんですね。どこが不満かっていうと、戦争の悲劇ということとは確かに書かれているんだけど、それはある意味結果であって、なぜそうした悲劇が起きたのかは見えてこない。つまり、今申し上げたような、僕の父親を軍隊に引っ張った力といいますか、体制といったものは、こうした作品からは見えてこないじゃないか。ちょっと極端な話ですけども、人が亡くなる悲しみというのは、病気とか天災だってそうなわけで、そういうこととは違う力が働いて、人々の運命を狂わせ、まさに僕の父親や、あるいは僕の家族が巻き込まれたような、そういうものが見えてこなければ、戦争を描いたことにならないのではないか。もちろん、児童文学でそれを表現することが難しいのはわかりますが、僕はそうした点がずっと不満だったわけです。ただ、そうかと言って、それを自分で書こうっていう、そういう発想は全くありませんでした。

そういう僕がですね、ある時、さっき申し上げたように、もう 30 年前に出た絵本ですから、その 3、4 年前ってことになりますが、この本（『麦畑になれなかった屋根たち』）のあとがきに書きましたが、ある方からですね、ご自分が書いた作品を読んでほしいっていう風に頼まれたんですね。仕事柄、そんなふうには、作品を読んでアドバイスしてくれという

ことは、時々あるわけなんです。西野さんという方なんです、僕が今役員をしている児童文学者協会の講座を受講されていた時だと思います。それで、喫茶店でお会いして、原稿を渡されたんですね。短いお話だったんで、その場で読みました。「ムクドリのまち」という作品でした。

西野さんは僕より年下ですから、もちろん戦争体験のある方ではなくて、確かその時、保谷に住んでいらして、保谷の戦争体験をつづる会という、そういう活動をしていらして、そこで中島飛行機の空襲のことをお知りになって、作品にしたいと思われたわけです。保谷も、中島飛行機のとぼっちりというか、隣ですから、かなり被害を受けたんですね。けやきにムクドリたちが集まっている、そんな平和な街に爆弾が落とされて……、といった、やや民話風な語り口の作品だったと思います。

で、僕は、それを読んだ時にですね、なんていうか、ほんとにビビビッて感じだったんです。なんか、すごい、探していたものに出会った、っていう気が、その時、したんですね。一つは、まず、これは絵本にしたいな、と思ったんです。広大な屋根にペンキを塗って、麦畑に偽装するなんて、変な話だけど、絵本の格好の題材じゃないですか。

もう一つ、僕の心に刺さってきたのは、1944年11月24日という日付ですね。えっ！と思ったんですね。というのは、ご存じのように、太平洋戦争は1941年、昭和16年の12月8日、真珠湾から始まりますね。で、昭和20年、1945年8月に戦争が終わるわけですね。それで、日本人に戦争、特に太平洋戦争って言って、何を連想しますか、って聞いたら、多くの人が「空襲」って答えると思うんですよ。なんか、大体、戦争のドラマなんかでも、太平洋戦争をイメージさせるものとしては、空襲って感じになりますよね。僕自身もそういうイメージがあったんですけど、ちょっと待って、B-29の初空襲って昭和19年の11月なの？ もう間もなくとは言いませんけど、もう少しで昭和20年になって、それで8月で戦争が終わるわけですから、ある意味、戦争末期ですね。えっ、そんな遅かったの、っていうのが、その時の正直な感じで、ある意味ショックなことでした。

これに関して、一つ例を挙げると、さっき名前を出した『かわいそうなぞう』。これは読まれた方も多いと思いますが、東京が連日空襲を受けて危ないっていうので、やむなく猛獣を殺処分した、そんなふうに書かれていますよね。ところが、上野の動物園の猛獣、最後に象が死んだのは、昭和18年の夏なんですよ。つまり、後で知ったんですが、一度だけ艦載機からの奇襲のようなことはありましたけれども、その時はまだ空襲なんかは始まっていなかった。ということは、逆に言うと、昭和19年の11月までは、日本は戦場ではなくて、外国で戦争してたっていうことになるじゃないですか。そのことに、ハッという風に気づかされたわけです。

さっき読んでいただいた中で、ここですね、B-29の絵が見開きいっぱい描かれていて、ここで最後に、「そしてこの時から、日本中が戦場となったのです」と書きましたが、この一行に、僕は結構思いを込めたつもりです。この時から日本中が戦場となった、つまり、この時までは日本は戦場ではなかった、アジアの国々や南の島々などが戦場だった、つまり、

日本が戦争を起こしたために、そうした国の多くの人たちが、巻き添えになって、命を落しました、っていうことですよ。1944年11月24日という日付は、そういうことを意味しているわけです。僕は、西野さんの作品を見せられた時、初めてそのことに気づいたわけです。先ほどからお話したように、父が軍人だったっていうこともあって、戦後生まれとしてはあの戦争のことを結構知ってるつもりだったんですけど、俺、何にも知らなかったな、っていう風に思われました。

そして、何より、物や人が不足している時に、千人のペンキ屋を集めて、屋根を塗りつぶす、という、すごいことですよ、すごい力です。そして、その力というのは、まさしく、僕の父親を軍隊に引き込んだ、その力というか、体制というか、そのものじゃないかと……、その時、そこまで言葉にできたかどうかわかりませんが、とにかく「これだ!」と思ったんです。

それで、これはぜひ絵本にしたい、と思ったんですが、なにしろ作者は僕じゃない、西野さんなわけですよ。それで、西野さんに、ぜひ共同創作で書かせてくれとお願いしようと思ったんですが、だけど、大体、共同創作ってうまくいかないんですよ。それぞれモチーフが違うじゃないですか。それで、ダメ元だと思って、この題材を僕に出来ないか、とお願いしたわけです。

僕、今まで七十何年生きてきた中で、プロポーズする時と、この時が一番決心が要りましたね。だって、人の題材を僕にしてくれて話でしょ。でも、ここで思い切って言わないと悔いが残るなと思ったし、こんな題材には二度と巡り合えないと思ったもんですから。そしたら意外と西野さん、あっさりいいですよと、承知してくれたんですね。いや、嬉しかったけれど、これは大変な責任を負ったな、という思いもありました。

それで、今申し上げたように、自分が戦争のことを何も知らないなと気づいて、まあ、いろいろ勉強を始めました。一つは、飛行機の歴史ですね。ライト兄弟が初めて飛行機を飛ばしたのが1903年です。で、飛行機が戦争に使われたのは、第一次大戦と言われてますけど、第一次大戦は1914年からです。だから、初飛行からたった10年しか経ってないわけですよ。よく戦争が科学を発展させると言われますが、少なくとも飛行機に関しては、残念ながら事実ですね。もちろん、最初は今からすれば素朴なものですが、あっという間に進化していった、軍用機は主に二つのコースというか、種類に分かれることになります。

一つが戦闘機。日本でいえば、零戦とかがそうですね。それからもう一つが爆撃機。もちろんB29は爆撃機です。それから、戦争末期に機銃掃射された話がよく出てきますが、そのグラマンとかは爆撃機ではなくて、戦闘機です。僕もこの時の勉強で覚えたわけで偉そうなことは言えないんですけど、たまにね、零戦が爆弾を落としたとかって書いてあったり、結構区別がついてない人が多いんです。戦闘機と爆撃機っていうのは、そもそも求められる性能が違います。

爆撃機っていうのは、その名の通り、爆撃のための飛行機ですから、重い爆弾を積むために、ある程度大きくなくては行けない。それから、大事なのはどこまで飛べるかという航続

距離です。せっかくたくさん爆弾を積んでも、すぐ隣の所までしか行けないのでは爆撃機の用を成しませんから、遠くまで飛べる航続距離っていうのが大事になります。それに対して、戦闘機っていうのは、それを迎え撃つ飛行機ですから、速さとか、俊敏さが求められるわけです。

余談になりますが、日本の自衛隊の飛行機は、ほとんどアメリカの飛行機ですよ。で、戦闘機は、名前がFなんとかっていうふうになっています。それに対して、爆撃機は、B-29 というふうにBがつきます。FはFighterのFです。それから、BはBomberのBです。日本の自衛隊にはBのつく飛行機はありません。なぜかという、専守防衛だから。もっとも、今ミサイルの時代ですから、その辺はあいまいな面がありますが、基本的に、専守防衛を掲げる日本の自衛隊には、外国に爆弾を落としに行く爆撃機はないんです。というか、持つてはいけないわけです。

これもやや余談になりますが、アメリカって、なにしろライト兄弟の国ですから、戦争のための飛行機も最初からすごく発達してる感じですけど、実はアメリカは、第二次大戦中は、空軍って、まだなかったんですよ。日本もそうでしたけれど、空軍という独立した組織はなくて、陸軍と海軍の両方に所属している形です。空軍が独自に発達したのはむしろヨーロッパの軍隊で、なぜかという、隣の国にすぐ爆撃に行けるから。アメリカは海に囲まれてますから、ヨーロッパやアジアから飛行機が飛んでくるってことはそもそも想定してないし、こちらから爆撃しに行くってことも元々想定していない。さすがのB-29だって、アメリカ本土から日本に爆撃に行くことは無理だった。だから、意外に、軍用機の開発に必死になったのは、後からなんですね。B-29は、ほんとにぎりぎり間に合った爆撃機なんです。

で、もう一つ、勉強した中で非常にショックを受けた本があって、それは絵本の最後に記した参考文献の中にありますけど、『戦略爆撃の思想』という前田哲男さんという軍事評論家の方が書かれた本です。この本のサブタイトルは、「ゲルニカ、重慶、広島への軌跡」となっていて、ゲルニカは知っていましたが、広島ももちろんわかるわけですけど、重慶ってなんだろうっていうことを、この時思ったわけです。これに答えられる日本人は何%くらいいるでしょうか。重慶っていうのは、中国の内陸、四川省の大きな街なわけですけど、なぜゲルニカと広島の間にも重慶かという、日本が中国と戦争を始めて、南京大虐殺があったかなかったかみたいな話がありますが、南京は中華民国政府の首都だったわけです。そこを日本軍が占領して、蒋介石の中華民国政府はどんどん奥地に首都を移していく。で、最後が重慶です。さすがに奥すぎて、日本軍はなかなか攻めて行けません。陸軍の軍隊をそこに移動させるのは無理すぎるし、飛行機も先ほどの航続距離の関係で、届かない。そこを蒋介石は戦時中の首都にして、日本への反撃の拠点にしたわけです。

日本は、爆撃機を日本本土から飛ばすことはできなかったんですけど、重慶って揚子江の一番上流の方なんですけど、真ん中辺の武漢というところを占領して、そこからだと爆撃機を飛ばせるということで、1939年、40年、41年の3年間にわたって、ただし、重慶って「霧

の町」っていうんだそうですけど、冬になると、霧のために上から見えなくなってしまうので、爆撃ができるのが5月から9月くらいまでなんです。それを、日本軍は3年間にわたって爆撃し続けました。ここに軍事基地などはほとんどありません。対象は、民間人です。前田哲男さんの本にはこんなふう書いてあります。「3年あまりにわたった空からの軍事作戦を20世紀戦争史の中に位置づけてとらえてみると、重慶爆撃は戦争の進化という命題の中で、特別に大きな意味を隠し持っていることがわかってくる。広島へ、そしてついにはICBMによる戦略思想へと至る戦争進化史のミッシングリンクの一つがそこにはあると主張してもそれほど大げさではない。」つまり、ナチスがスペインのゲルニカという街を爆撃したのが、民間人を虐殺した最初の爆撃だというふうに言われていますけど、そこから東京、広島と続く、そのミッシングリンクの中に、実は日本軍による重慶への3年にわたる爆撃があったということで、僕はそのことを全く知りませんでした。

という風にですね、いろんな本を読むと、自分がいかにあの戦争のことを知らなかったかっていうことがどんどん出てくる。ところがですね、それはいいんですけども、それを絵本に盛り込もうとすると、これはとんでもなく難しい。重慶って町の名前も、さっき読んでいただいたように絵本の中に出てくるわけですが、多分、ほとんどの読者、まして、子ども読者にその意味は分からない。でも、僕は入れたかったんです。

こんな調子で、ほんとにこの題材を子ども向けの絵本にするってできるだろうかっていう心配も膨らんでいくわけで、実は、途中で、担当の編集者から、「藤田さん、これ、ちょっと絵本、無理じゃないの。これだけ調べたんだから、絵本じゃなくてノンフィクションにしましょうよ」とまで言われたんですけど、僕はどうしても絵本にしたかったんです。それで、絵の配置なども含め、なんとか絵本としての原案を書いて、永島さんに渡したわけです。

ある世代以上の方はご存じだと思いますが、永島慎二という名前は、漫画家の世界では神様みたいな人で、僕ら世代の漫画家志望の人にとってはとても憧れの存在でした。だから、永島さんが引き受けてくださって、それは本当に嬉しかったんですが、永島さんからラフが戻ってきた時に、僕の書いた原案と違うっていうか、直ってきたっていうところが、主に三つあったんですね。

一つはですね、今見ていただいた通りで、2か所ぐらい漫画のコマ割りのような形で、耕一さんと他の人たちの会話やなんかが表現さされていて、これはやっぱり漫画家さんだなと思いました。二つ目はですね、一番最後の画面なんですけど、それから10年、20年経って、耕一さんがおじさんを継いでペンキ屋さんになって、屋根の上で仕事している、っていう場面になりますよね。ここ、僕の原案ではもっと引いたアングルで、この上をアメリカ軍の軍用機が飛んでいる。それが僕の案でした。つまり、確かに平和になったかもしれないけど、やっぱりそういう一面があるじゃないですか。日本にはアメリカ軍の基地があって、その飛行機が私たちの上を飛んでるわけだよね、ということを、僕は表現したかったんですけど、それは却下されました。後で考えて、それだと、耕一さんの「戦後」の意味が、ちょっとねじれてしまうというか、余りに「盛り込みすぎ」というふうに、永島さんは考えられたので

はないかと思います。

そして、もう一つ決定的に重要っていうか、永島さんによって変わったのは、「麦畑になれなかった屋根たち」っていう、この本のタイトルなんです。実は、僕の元々の案では、「麦畑になれなかった屋根」だったんですよ。そしたら、戻ってきたら、「たち」っていうのがついてるんですね。ああ、これは永島さんの世界だな、と思いましたね。「麦畑になれなかった屋根」と、「麦畑になれなかった屋根たち」とでは、すごい違うんですよ。うまく説明できませんけども、それによって、なんか屋根がね、ただの屋根じゃなくなるじゃないですか。「屋根たち」で、屋根がある種、人格化されるっていうこともあるし、屋根だけじゃなくて、麦畑になれなかったのはね、なんていうかな、人間たち、工場、そういうものも含めて麦畑にして隠そうとしたけども、それはある種ナンセンスなことだったわけですよ、麦畑になろうとしたんだけど、結局はなれなかった私たち……、という感じもあって、だから「屋根たち」になって戻ってきた時は、なるほどなと思えて、とても嬉しかったことを覚えています。

そんなことで、この絵本は、図書館によっては絵本のところじゃなくて、高学年向けの読み物のところにあったりするんですよ。いわゆる普通のっていうか、小さいお子さんがこれを読んでわかるという絵本ではないわけで、今申し上げてきたような、僕の「勉強」の跡を詰め込みすぎた、絵本としてはある種無理がある一冊かもしれませんけれど、こういう形でなんとか絵本にできたことは、やはりとても良かったなと今でも思っています。

今日お配りした資料の中で、他にもいくつかお話したかったんですけど、この写真ね、11月24日の朝、サイパンの基地をB-29の編隊が離陸する、つまりこれから武蔵野市に向かうところの写真です。この前、8月15日にNHKの特番でこの時の映像が出ましたよね。びっくりしたのは、B-29の機内に、サイパンからのラジオ放送で、音楽が流れてるんですよ。日本の軍隊では絶対に考えられないことですよ。でも、あれは、ある種遊びでやってるんじゃないくて、おそらく心理学者なんかが関与して、そういうリラックスしていた方が成果が上がるよっていうことじゃないかな、と僕は思うんですけども。実はB-29は、最初、インドのカルカッタを基地にしたんです。何しろB-29っていうのはすごいお金をかけて開発された飛行機で、その開発費用は30億ドルと言われます。原爆のマンハッタン計画が20億ドルですから、それほど画期的な爆撃機だったわけです。

で、1944年の春ぐらいにようやくテスト機が完成ということで、まだまだ手探りのところを持った飛行機だったんですが、まず、インドのカルカッタを基地にして、中国の成都や重慶を中継基地にして、日本に爆撃を仕掛けるという計画でした。但し、東京まではまだ届かないので、B-29の日本初空襲は、北九州でした。そして、その年の夏になってサイパンが陥落して急いで飛行場を作り、やっと東京に届くという形になるんですけども、実は同じ11月24日、カルカッタの基地からも、タイのバンコクにB-29が爆撃に行っています。つまり、1944年11月24日にB-29の爆撃を受けたのは、実は武蔵野市だけではなくて、タイのバンコクも空襲を受けている。このことは、僕も絵本を書いた後で知ったのですけれども、

あの戦争を考えるうえで、日本人が目を向けなければならないことだと思います。

ということで、本当になんか理屈っぽい絵本で、今日も理屈っぽい話になってしまったんですけど、戦争っていうのは、被害だけではなくて、被害と加害の渦の中に巻き込まれる。それをちゃんと見ていかないと、戦争の実相には届かないと思うんです。そういうことを、この絵本を通じて考えていただく一助となれば、作者としては、とてもうれしいなというふうに思っております。今日は、こういう機会を与えていただいて、本当にありがとうございました。

それから、時間の関係で、資料としてお配りしたのにまったく触れられませんでした、戦時中に配られた、こういう小さなパンフレットみたいなものがあるんです。そのコピーです。表紙ですが、昔は右から読むじゃないですか。「時局防空必携」というんですが、こうしたものが、政府から全家庭に配られたんですね。発行が1941年、昭和16年の12月。つまり、太平洋戦争がまさに始まったころですね。その前に、さっき申し上げたように、日本は3年にわたって重慶に爆撃をして、そこでは焼夷弾が主に使われました。焼夷弾は、ヨーロッパよりもアジアで、つまり、家が木と紙でできている中国や日本でこそ威力を発揮する爆弾なんですね。爆弾そのもので殺傷するというより、火事を引き起こすための爆弾なんです。東京大空襲などであれだけ被害が大きかったのは、その焼夷弾のせいですね。重慶で日本軍が盛んに使って、それを言わばアメリカ軍は、日本の空襲に際して、言わば真似たとも言えるわけなんですけども、この「防空必携」を見るとですね、焼夷弾なんて、どうってことはない、消せますみたいなことを書いてある。

今から見ると、笑っちゃうようなことなんです、こうした資料からも、戦争というのが、天災ではなくて、人がある意図をもって引き起こすものなんだということが、見えてくるのではないかと思います。

ということで、これからも武蔵野市の、B-29の本土初空襲を受けた武蔵野市ならではの、平和への取組みが続いていくことを、そして作者としては、この絵本を読み続けていただければ、こんなに嬉しいことはありません。

まことにバタバタとした話になりましたけど、これで作者としての話とさせていただきます。ありがとうございました。